

# 保姆と詩感の教養

倉 橋 惣 三

「玉の杯底なきが如し」といふ言葉がある。保姆にして詩感なきは、まさにそれである。必ずしも保姆に限つたことでなく、すべての人に於てそうであるけれども、幼児教育者に於て、殊に、此の憾みの深からざるを得ぬ。詩感は自然に對する感觸の繊細さである。心のはだのこまやかさである。而して、それは幼児の心の貴重な特質の一つである。詩感の所有者に接するに詩感の缺くべからざるは言ふまでもなす。

幼兒の心の特質を粗野だと見る人がある。確にそう見られることが常である。しかし、その粗野は原始的粗野であつて、すざんだ粗野、痲痺した粗野では決してない。原始的粗野には、その裏に一種の繊細と、こまやかさをもつてゐるのが特色である。人間的にもそうであるが、殊に、自然に對して、それが最も顯著である。或は顯著でないかも知れぬが、最も眞實である。草の葉に、土の色に、空の光りに雲の動きに、ふと動く幼兒の眞實なる詩感を否定することは出来ない。たゞ、その詩感の、餘りに眞實に、餘りに純な爲に、大人の場合のように浮動しない。漂泊しない。沉んや低徊しない。ふと湧き、ふ

と戦いて、直ぐ其のまゝに消へてゆく、幼児自身素より心づかない程の速かさに通り過ぎて仕舞ふ。その爲に、見へないものには見へないかも知れない。捉へられないものには捉へられないかも知れない。そこで、外面の粗野だけが言はれるのであるけれども、その淡さが中の微妙さは、見へるもの、捉へられるものには見のがせない。——此の詩感の所有者の友として、保姆に詩感を缺くべからざるは言ふまでもなす。

○

「玉の杯底なきが如し」などは、第三者としての吾等の憾みである。幼児自身、詩感なき保姆に、どういふ氣持ちを持たされることであらうか。そよ風にそよぐ若葉が、古木の幹、岩石の脊に居るような物足りなさを感じずにはゐられまい。漣立て、ゆく細流が、コンクリートの堤に沿ふてゐる時のような物足りなさを感じずにはゐられまい。別段何が不服といふでもないが、やつぱり不満を免れぬのである。我が小枝の、そよぎのまゝに並木もそよいで愆しい。漣のこまかいゆらぎのまゝを小草の岸にも受けて貰ひたい。といつた不満を禁じ得ないのである。微かながら、心の底の不満である。

保姆は幼児と同じ目で物を見、同じ耳で物を聞き、同じ心で物に觸れる人でなければならぬ。さればこそ幼児は、その人と共に物を見、物を聞き、物に觸るゝことを樂しむのである。同じ喜びに喜び、同じ驚きに驚き、同じ感激に感激して貰へるからである。而して、その「同じ」といふは、たゞ同じ形、

同じ種類、同じ意味にとかいふことのみではない。心の同じ振動に於てといふことでもあらねばならぬ。否、それこそ、一番大切な要件であらねばならぬ。敏に對する鈍。純に對する濁。わけても、生に對する濁。そういふ不一致であつてはならぬのである。

○

斯くいへばとて、保姆が皆詩人でなければならぬといふのではない。況んや、幼児の前に詩を語り、詩を誦せよといふのでは勿論ない。敢て詩感といふ。すなはち、心性の一素質としての詩感の所有者たるを求むるのである。しかも、われ等に、殊に、教育者に、またしても缺け易いのが、此の詩感そのものである。そこで、不斷に之れが教育を必要とする。涸れ、乾き、固化し易い吾れ等の心に、詩感のやしなひを必要とするのである。そこでいゝ繪を見ること、いゝ音楽をきくこと、殊に、いゝ詩を讀むこと、此の三つの中でも、いゝ詩を學ぶことを、保姆の教育の最も重要な一つとしなければならぬ。幾多の重要な多面の教育に併せて、詩の教養を怠つてはならぬのである。——保姆として一番大切な幼児と同じ心の感觸を養ひ育てるために。

殊に、此頃の傾向として、讀むもの聴くものが、多くは理に偏し、術に専らになり易い中にあつて、保姆の傍には、是非ともいゝ詩集がなければならぬ。その詩は、その人の趣味の好むところに任す。詩感の豊富なる眞の詩人のものならば、どれでもいい。そして、詩感を養つて呉れるものならば、どれで

もいゝ。短歌でもいゝ。長詩でもいゝ。我國の詩人のでもいゝ。外國の詩人のでもいゝ。吟誦反覆、以て、其人としての詩感を鈍らさぬように自己教養すべきである。

○  
詩感だけが保姆の要件でないことは勿論である。故にこそは玉に譬へた。たゞ、如何に他の要件に完き保姆であつても、詩感なきは、その玉に底なきが如しといふのである。玉として貴ければ貴い程、底なきが益々惜しいといふ譯である。但し、何人も、われに詩感なしとてヒ感し給ひそ。詩感元來誰れにでもあるのである。たゞ、斷えず養はないと涸れることがある。さればこそ、その自己の教養が必要だといふのである。

山は若葉人は身輕き比に哉 一茶